
ドリームキャッチャー

ツバサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドリームキャッチャー

【Nコード】

N3421BA

【作者名】

ツバサ

【あらすじ】

私の夢はお医者さんになること。親友の奈美と共に一緒に夢を目指していた。けど私の夢は突如消え去った。

親友を失い絶望する私の前に現れたのは自分を夢を捕まえる者、ドリームキャッチャーと名乗る謎の少年、レオン。ドリームサイト。

「君の望みはなんだい？」

レオンの問いに私は答える。私の夢は、親友を奪った奴の復讐だと。

僕の初オリジナル長編です。ごたごたの作品になるかもしれません

がよろしくお願い致します。

プロローグ（前書き）

僕の初長編作品です。いつも道理、誤字脱字多いと思いますが（いつもどおりって・・・）よろしくお願いしますww

プロローグ

「あつ愛奈おはよ〜」
私の名前、加藤 愛奈の名を呼ばれ後ろを振り返り私の名前を呼んだ人物へ言葉を返す。

「奈美おはよ」

私は佐藤 奈美に挨拶を返す。奈美と私は同じ大学の医学部に通う同級生だ。奈美とは中学校まで一緒に大親友だったが高校で別れたのだった。しかし大学がたまたま一緒だったので再び親友になった。元々私の家系、加藤家は代々内科を営んでいる。中には名医となった人もいるそうだ。私も小学生のころからお医者さんになりたがっていた。そして二浪したうえで大学に入ったのだ。だから同級生といっても年下が多かったのでもうれしいサプライズだった。私たちは無駄話を叩きながら大学内へと入った。

プロローグ（後書き）

とりあえずプロローグという名の人物紹介でした。どういった作品になるかわ後日ツバサ小説紹介にもアップしたいとおもいます。

私たちの日常（前書き）

サブタイトル何にしようか悩みました。

愛奈「2話目にしてサブタイトル悩むって・・・」
意外と難しいんだぞ。逆に始まったばかりだから事件とか起きてないし・・・

愛奈「事件って・・・何が起きるのよ!!」

あわわわ・・・ほ、本編どうぞ。

愛奈「誤魔化すなー!!」

私たちの日常

「あー疲れたー」

奈美は伸びをしながらつぶやいた。今日のカリキュラムは終わって今は大学内の図書室に来ている。特に調べものがあるというわけではないのだが他の生徒の来客が少ない図書室が意外と疲れを癒せる。私たちの穴場だ。

「だよね。だけど明日楽しみだね」

「だね。いつもの退屈な講義より為になるだろうし」

そう言って私たちは笑いあった。明日はいつもの講義ではなく内科医スペシャリストの名医と呼ばれている、天童てんどう宙先生そらの講義があるのだ。内科医を夢見る私にとっては嬉しい知らせだ。そして天童先生は・・・

「天童先生ってたしか加藤内科医のところで修行したんだっけ？」

「うん、そうだよ」

「じゃ〜愛奈通して話すことができる？」

「一応顔見知りだからね」

「よしっ!!!」

そう、天童先生は私とは顔みしりなのだ。なので久しぶりの対面だ。奈美は私の話を聞いて嬉しそうにはしゃいでる。私はそれを見て苦笑しながら天童先生のことを思い出した。

私たちの日常（後書き）

愛奈「それで、事件って？」

まあ、少しサスペンス系になるかなと。

愛奈「ドリームキャッチャーってファンタジー系の話っぽいのに・・・

」・

ま、まあね。少しはファンタジーっぽい感じにするし。まあ、どちらかといえばライトノベルっぽいかな。

愛奈「ふーん。まっどうでもいいけど」

どうでもいいのかよ！！

何も無い日常だったのに(前書き)

今回はサブタイトルアツサリ決まりました。

愛奈「それが当たり前だと思うし、前回のサブタイトル『私たちの日常』とほとんど変わってないじゃん・・・」

実はいうと『私たちの日常』が決まった時から今回のサブタイトル決まっていました。後前回で振った事件発生します。

愛奈「ちよっ、ちよと!!さらつとすごいこといわないでよ!!」
本編どうぞ!!

愛奈「だから誤魔化すな!!」

何も無い日常だったのに

「はい、これで私の講義を終わります」

天童先生が言うのと座っていた生徒達が帰りの支度を始めた。私もその一人だ。隣を見ると奈美は早くも支度を終えまだかまだかと私を見ている。

「できたよ、でも天童先生と話できるかはわからないからね」

「いいから、いいから。天童先生追いかけてよ」

「ちよつ、奈美引つ張らないで」

奈美は私を無理やりひっぱて天童先生を追いかける。途中からは何とか持ち直して私も普通に走れた。

「あつ、いたいた。」

奈美がそう言つて指をさした方向を見ると確かに天童先生はいた。歩調を少し緩め私がかける。

「天童先生、お久しぶりです。私のこと覚えてます？」

後ろから声をかけられびつくりしたように後ろを振り返るが私の顔を見ると懐かしそうにいった。

「愛奈ちゃん？久しぶりだね。」

「はい、愛奈です。あつ隣にいるのが親友の奈美です」

「はじめまして、奈美です。天童先生の噂はよく聞いています」

奈美が私でも聞いたことないようなハキハキとした口調で言う。

「ははっ私の噂か。どういったものか恐ろしな」

天童先生は少し恥ずかしげに謙遜した。

「私に加藤内科医を出てからだから・・・六年ぶりかな。あの時愛

奈ちゃんは15歳だったよね。あの時よりも背が伸びたみたいだね」

「そうですね・・・天童先生はおかわりないようで」

「いや、私も少し老^ふけたよ。」

「そんなことないですよ」

私はそう言つと天童先生は笑った。奈美は変わらず尊敬の眼差しで

天童先生を見つめている。

「先生、最近また難しい手術をなされたようで
今まで黙って聞いていた奈美が話しかける。」

「え〜と・・・あ〜あれか。あれはたしかに難しかったよ」

そう言つてまた笑つた。きつと成功した話なんだろう。私たちの目指すべき人が目の前にいる。私は続いて言葉を発しようとした。しかしその声が二つの破裂音でかき消された。

『パンパン』

「なっ、うっ」

「きやつ・・・」

二つの叫び声が聞こえた。前を見ると血を流し横たわる奈美と天童先生の姿があつた。私には何が起つたのかわからなかつた。遠くから「誰か撃たれたぞー」という声が鳴り響いた。

何も無い日常だったのに（後書き）

事件発生しました。

愛奈「奈美と天童先生どうなるのよ!!」

それは次回で明らかになりますよ。

愛奈「奈美ー」

落ち込んでる愛奈もカワイイな。

愛奈「なっ何言ってるのよ!!」

ごめんごめん。では、また次回!!

愛奈「カワイイって、設定上私の方が年上なのに・・・大人なのに・・・」

夢を捕まえし者（前書き）

愛奈「遅い!!」

いや、遅くないだろ・・・

愛奈「奈美と天童先生はどうなったのか教えなさい!!」

なんか・・・怖い。え〜と話がここから中心に入っていきます。新

キャラも登場しーす

愛奈「そんなこといいから教える!!」

あわわわ。ほっ本編どうぞ。

夢を捕まえし者

何が起こったのかわからなかった。病院に運ばれた奈美と天童先生。私もついて行きたかったが警察に止められ第一発見者として事情を聞かれた。私は「わかりません」の一点張りだった。事実本当に何が起こったのか分からなかった。その後、警察に解放され二人の運ばれた大学病院に行きそこでショックな事を聞かされた。天童先生は病院に運ばれるときに息を引き取られたらしい。そして奈美は何とか一命を取り留めたらしいが今の医療ではもう意識は戻らないらしい。いわゆる植物人間というやつだ。撃たれた場所は胸辺りだったらしいが倒れたときに頭を強く打つたらしい。

「奈美・・・奈美!!」

私は一人病院の待合い室で泣き崩れていた。奈美のご両親も赤く目をはらしていたが今は落ち着きをとり戻らされている。

「なんで、奈美が・・・天童先生も」

警察の調べを少し聞かせてもらったが犯人への手がかりはほぼ0らしい。そして犯人のねらいは天童先生だったらしい。つまり奈美は流れ弾をくらったのだ。犯人と自分の無力さに腹がたつ。

「なんでよ・・・なんでよ!!」

声もれる。そのとき、隣から声が聞こえた。

「僕が君の望みをかなえてあげようか？」

「誰!？」

声のした方を見ると12、3歳の子供が立っていた。

「僕は夢を捕まえる者、みんなからはドリームキャッチャーと呼ばれてるよ。人の夢を叶えるのが僕の役目」

「何・・・言ってるの?」

「だから、僕が君の望みをかなえてあげるって言ってるんだよ」

「私の・・・望み?」

私はわけがわからず聞き返す。こんな子供に私の望みが叶えられるは

ずはない。

「ふざけないで！！君はすぐにお母さんのもとに帰りなさい」

私は怒りを抑えながら言う。

「ふざけてないさ。そもそも僕は人間じゃない」

「人間じゃない？だったらなんなのよ！！」

私のいら立ちが増していく。

「だから言っただろ。僕は夢を捕まえる者、ドリームキャッチャーだよ。まあ、信じると言っても無理か。だったら見てな」

男の子がそう言う姿が半透明になってい消え去った。

「嘘……」

信じられない。そんなことがあるはずない。でも目の前の男の子はたやすく消え去った。茫然としているとまたぼんやりと輪郭が出てきて、男の子が現れた。

「これで、信じてもらえたかな？」

「そんな……」

「まあ、びっくりするのも仕方ないか。あつ、まだ自己紹介していなかったね。僕の名前はレオンⅡドリームⅡサイト。レオンでいいよ、加藤愛奈さん」

「なっ……」

絶句する。名乗った覚えもないのにその男の子、レオンは私の名前を呼んだ

「信じてもらえたかな。僕の話は神様の使いとでも思ってくれたらいいよ」

「神様の……使い」

「そう。神様の使いさ。では、ドリームキャッチャーとしてあらためて聞こう。君の望みはなんだい？」

まだ理解が追いつかない。でもレオンはたしかにこの世の人ではないらしい。私の望み……

「私の望み……私の望みは」

私は息を大きくすう。私の望みは

「犯人の復讐よ」

自分でもびっくりするぐらい低い声だ言い切った。

夢を捕まえし者（後書き）

え〜と、本小説のタイトルルドリームキャッチャーが出てきました。

愛奈は怒り奮闘のまま出て行きました。こっ怖かった。

愛奈「さつさと続き書きなさいよ」

あつ愛奈！！怖いつて。

愛奈「いいから、書きなさいよ」

・・・はい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3421ba/>

ドリームキャッチャー

2012年1月14日13時49分発行